

東京学芸大学連続講演会 第9回

「奥多摩町における山林のシカ被害現状と対策」

河村文夫氏

東京都奥多摩町 町長



奥多摩町の今昔

みなさんこんにちは、奥多摩町長の河村と申します。奥多摩には皆さん行ったことがあるでしょうか。東京の1番西のはずれにある町です。先ほど、先生方がいろいろとお話をされましたが、隣は山梨県の丹波山村・小菅村が境となっております。都民の水と言われる小河内ダム、通称奥多摩湖は1億8000万トンの水を貯めており、その地元の町であります。私たちの町は、面積にすると225.63km²あり、その全域が秩父・多摩・甲斐国立公園であります。昭和25年に秩父・多摩国立公園の指定を受けそれまで皆様に親しまれてまいりまして、その後つい最近甲斐の指定を受けました。これから、私たちの町の鹿の食害について話してまいりますが、まず町の状況を理解していただきたく存じます。

小河内ダムは戦前の昭和12年から工事が始まり、昭和32年の11月に完成しました。戦前戦後をはさみまして、東京都の水を将来的に確保していくということで東京都自身が作ったダムであり、当時都道府県が作ったダムとしては非常に珍しいとされておりました。当時のダムの中では東洋一といわれ佐久間ダムができるまでは日本で一番大きいダムでした。中央線から立川で青梅線に乗り換え、現在では駅名が改変されて奥多摩駅となっておりますが、かつての終点の氷川駅に氷川という町がありました。また青梅市に接した地区に古里村という村があり、これら一町二村が昭和30年に合併し、昨年でちょうど50周年を迎えました。

特に氷川町は、林業と石灰工業が盛んでありました。現在の青梅線は昭和18年に開通し、当時は御嶽の駅までしか通っていませんでした。そこから川井、古里、鳩ノ巣、白丸と続きますが、この4駅は日原にある天祖山という石灰岩が基盤岩となっている山からセメントや鉄鋼の触媒としての使うために、京浜工業地帯に運搬用として昭和19年に青梅電気鉄道が鉄道をしま

した。そして後に国鉄に買収され、今にいたっているわけであります。かつては1日に、機関車が17両の編成を持つほど、石灰石の運搬が盛んでありました。そんな状況を経て、今では生産量が減り、列車が廃止となりほとんどがトラック輸送になっているという現状になっています。

また、町の合併以前から林業は盛んで、炭焼きをして都会に供給するという仕事が生業としてなりたっていました。当時は馬や牛で運んでいたという話をきいています。それ以降拡大造林が始まり、従来あったクリやブナなどの天然の雑木林は切り倒され、人工林である、スギ・ヒノキを植えられることとなりました。昭和39年の当時の町長は人づくり・山作り・道作りを目標に掲げていて、国からも林業を振興させるという目的から拡大造林に対する厚い助成があつて、現在の山のように山のほとんどがスギ・ヒノキになってしまいました。また日原鍾乳洞という景勝地がありますが、過去から現在までほぼ手をつけていない場所であり、このように森林にもところどころ手が入っていない昔のままの状態の林があります。岩でごつごつしていたり植林に適さないとされた場所は今でもそのままの姿で残っており、紅葉の時期にいい景色を見せるのがこれらの場所です。そんな奥多摩町の背景をお話した上でシカの食害の問題についてお話をしようと思います。

抱えている問題

当時奥多摩湖が完成するまでの間、水道局に勤める幹部の方々はほとんど公舎にはいていました。かつて中学校は古里と氷川と小河内に3つありましたが、今では氷川と古里に減ってしまい、現在では1学年に1人という状態で、30人学級にしようしようと世間では騒がれている中、私達の町ではすでに達成されています。クラブ活動で野球をしたくても男の子が6人しかないという現象が起こっています。2つの社会福祉法人の保育園も定員割れしている状況です。そうではありませんが当時のダムの建設時には、奥多摩は人口1万6000人をかかえる町でした。今はだんだんと過疎になり、自分たちの生活を支えるように職に就くためにさらに人々が職を求めて都会へと出て行ってしまうので過疎化が進行しています。現在人口は6844人でその減少は止まっておりません。しかしながら、過去をもう少しさかのぼり、日原の石灰石ができる以前の町はどうであったかということ、大正15年の国勢調査によれば1町2村合わせた人口は7000人いました。その点では7000人ぐらいが奥多摩の町に人が生活するにはちょうどいい

人数なのかなと思うしだいであります。

もう一つあげられる問題が少子高齢化の問題です。高齢化が東京都の中では桧原村について激しく、お年寄りの方の割合が38%をしめています。一定のバランスのとれた層の人々が住んでいるということでは、景色がいい、水がきれい、人情がいいという点では私はそれでいいのではないかと考えています。高齢者の皆さんには元気で長生きしてもらいたいと思い、現在それにちなんだ施策を考えています。

奥多摩の林業

小野寺先生の多摩川の源流はどこかという問題について興味深く聞かせていただきました。今、源流域として認知されているのは笠取山の水干であり、比較的なだらかな山の巻き道を登っていったところにあります。そこから一滴一滴と落ちた水が多摩川の源流だとされています。

東京都には23区26市、13の町村があり、そのうち島に9つの町村があります。島以外の町村は横田基地の横の瑞穂町、桧原村、日の出町、奥多摩町の4町村であります。行政面積は225.63平方キロメートルで東京都の面積の約10分の1にあたります。そのうち94%が山林であり、21161ヘクタールで多摩地区の森林の40パーセントにあたります。v字型の地形をしていて、人々は国道411号線の端にあるなだらかな丘陵上に家を建て、集落を作り生活しています。それ以外の場所はほとんど山です。人工林は50%でそのうちの90%は人工林として35年以上の年月のたっているスギ・ヒノキ林であります。

鳩ノ巣は河川幅が狭く両岸に岩が出ており、川の上流をせき止めて材木をもって来て、水がたまったら堰を切り、そして1本1本木が流れ出すという一本流し（鉄砲流し）の手法がとられていました。その場として使われていたのが、鳩ノ巣溪谷であります。鳩ノ巣溪谷の1本出しをしている際に、鳩がたくさんいたことから鳩ノ巣という地名がついたとされています。鳩ノ巣から出した材木は大丹波川と多摩川のぶつかる川井まで流れ、そこで川幅が広がることを利用し、この地点からいかだをながしたといわれています。かつて足場にはスギ丸太が使われ、その長いスギ丸太は30年かけて育てられていました。30haの林をもっている家は1年に1ha切り、30年かけて回転させていくことで林業を営んでいた時代がありました。山の仕事は10年間手が抜けないもので、植林をして、下草刈りをして、大きくなったらつるをとったりなど手入れがいるもので

す。そして間伐をしたりとこうした作業によって生活が成り立っていたわけですが、外材が入ってきたことなどがきっかけとなり、だんだん山が荒れてくるようになりました。手入れをしないといけないのですが、材木が売れないとなると面倒を見るのがなくなってしまいます。これら荒廃の要因は、1つは森林の利用方法が変わってきたということ、

2つ目は外材が入ってきて値段が10分の1となってこれまでの経営ができなくなってしまったということにあると思います。もう一方、農村化の拡大であります。森林を持っている人が生業として木を切ることなく山を出て行ってしまふ・また町以外の方が山の所有者になっているという現象が見られています。この人たちは山を財産の価値としてだけ求めていて、山に関心があるわけではなく、後に売れば良いとい考えでいるわけです。そんな理由から、やはり手入れはされずに、荒れていってしまいます。また高齢化、世代交代が進んでいないという理由も兼ねあって今の現状に至っているといえます。手入れをすることで労働投資に見合うお金が入れば良いのですが、そういうわけにもいかず手入れが怠り、森林に陽が入らなくなり、下草がなくなり、表土が流れるという状況に陥ってしまいました。

シカの生態

一方では鹿が増え被害が発生してきているということもいわれています。雲取山には2000頭の鹿がいるのではないかと予想されています。鹿が2000頭に増えた原因は25年間禁猟したことによるとされています。それ以来いろんな被害が出てきました。当時公害局という対策局ができて自然保護が騒がれ、石灰石の採掘においても地元住民と話し合いを持つこともありました。かつては山の手入れをすることも自然保護の立場からするとよくないとされ、いったい保護する立場の人々は山と生活するということをどのように考えているのかと疑問に思ったこともありました。30代のころでしたけれども。私達はなにも好んで自然破壊をしているわけではないと訴えましたが、後には自然保護団体さんの妥協をいただくことになりました。いろんな問題を解決する際に都会に住む方々と、地元で暮らす者との間で意見が一致するのに非常に時間を要するという感想を持ちました。そういうわけで、今回奥多摩地域での問題を皆さんに知ってもらうためにはこの会は非常に有意義であると考えている次第であります。

鹿というのは1年に1頭の子を産みます。昔は1年に30cmくらいの降雪が3～4回ほどありましたが、今で

はそれ以上降るといことはありません。暖かくなった環境のもとで自然に死ぬといことは考えられません。なので仮に500頭の鹿がいてそのうちの半分の250頭がメスだとすると、1年に鹿は250頭ずつ増えているという計算になります。こうして加速度的に増えていく鹿と共に、スギの成長速度はというと以前と変わらないので、手入れは最低10年を必要とします。しかしそれが立派な木となるまでに、鹿が芽の部分を食べてしまい、その芽から木が育っていくことはなくなるので成長がストップしてしまいます。またスギの皮をむいて、つゆを飲んだり、角を磨いたりという被害もあります。このような被害が鹿を25年間取らなかったことにより増えました。そして対応策として電気柵を設けるようになりました。しかし当時の電気柵は安っぽいものですぐに鹿が飛び越えられるもので、対処しきれいていませんでした。後にこの現地へ赴きましたが、12haの山が崩れ大変な状況になっていました。

食害が生んだ大きな被害

平成16年7月11日に集中豪雨があり、これまでにないような天候にみまわれ鹿の食害にあった森林の表土が大量に流されました。その表土が押し流された先に川苔山という山があり、その山の水源地での取水ができなくなったという害を被ることとなってしまったのです。以前から山が裸地化したら、後で崩れるということをお訴えていたのですが、なかなか取り合ってくれる人はおらず、後に裸地化が原因で山が崩れ取水できなくなってしまったという人々の生活に絡んだ話題を出したところ、NHKが取材に来てくれるという展開がありました。その結果いろんな人が動き出し、東京都に対して文書を出し、それによって対処策ができるようになってきました。そこで一つ感じたことは、山一つが崩れたということだけでは人は動かないということです。ですが人間にとっての害が生まれるというのであれば、人は助けになって動いてくれるということを学びました。登山道がなくなり、人が歩けば土がぼろぼろと取れ、川苔山の状況はすさまじいものとなってしまいました。

奥多摩では120haが鹿の食害を受けていて、取水している人々に多大な影響を与えました。天祖山の原生林を枯れさせ、貴重な植物も食べられてしまいました。多くの方に親しまれた花々が消えてしまいました。これはただ単に東京都の審議の席上で解決されることではなく、私は実際に現場に来て見ていただくことを望んでいます。現在は予算を組んでいただき、2年かけて

山の修復と造林をできるようにになりました。2億円もの税金をかけ着手することとなりましたが、今後いろいろなことをする上では反省点として今後に生かしていきたいと考えております。行政がことを進める際に、1つの視点に偏ることなくさまざまな視野からとらえ、効率よく将来を見据えて決断をしていかなければならないと思います。町長になって思うことは、問題の小さい大きいは別として、常識的に考え判断を下していきたいということです。

鹿の被害にあった造林も東京都のバックアップのもとで、造林が再開しつつあります。鹿については、強制的に捕獲していこうという施策が行われています。1年に250頭ほど捕らないとさらに今後増えていってしまう見通しも立っており、東京都の鹿の管理計画として現在実行されています。造林については、財政支援をいただきながら、これからは動物が餌として食べる樹種も増やしていこうと、造林の樹種転換を考えております。またスギ花粉において、花粉の少ないスギを植えよう、枝打ちをして花粉の量を少なくしようという努力もしています。日原の造林には鹿柵があり、一定の大きさになるまでスギにビニールをかぶせるということで被害を防ごうと工夫をしております。

都市との交流による活性化

今日来ていただいた皆さんにご理解していただきたいのが、山に住む人と都市に住む人々が交流することで町が活性化するのではないかということです。来年の4月に施設がオープン予定でありまして、その施設を利用して農業をし、地域の方と交流を深めることを目的とするグリーンツーリズムを提案しました。また自然を生かしたエコツーリズムも推進していきたいと考えております。800本以上の巨樹を、実際に見ることも大切なのですが大勢の人が足を踏み入れると根がやられてしまうということから、立ち入らずとも説明を聞くことのできる施設を建てて、多くの方に知ってもらえることができればとも考えています。

山のことについては昭島市が市民の森を開催しています。市民が森を管理する活動です。特に昭島市と武蔵野市は多摩川の地下水を使って生活を営んでいるということから、奥多摩の森を育てていこうというスローガンが掲げられています。その森林隊の方々の登録が80人になったということで、日頃森を守ろうと感じている方が増えているのかなと実感しています。

鹿の問題についてですが、継続的に捕獲するのであれば、この鹿肉が町おこしにつながらないかと考えま

した。そして、この鹿対策や森林の公益的機能の回復のために行う造林事業や鹿の捕獲の人員・物資の輸送などを行うために森林モノレールを設置しました。これは5人乗車することができ、2車両あります。また200kgのものを運ぶ貨車もついています。時速は2kmでとても遅い乗り物ですが、山の火災時、山岳事故などの緊急時に使える多目的なモノレールとして利用されていくことを期待しています。

私どもは奥多摩町についてのシンポジウムを何度かしておりますが、大勢の方に関心を持っていただき、また奥多摩のファンにもなっていただきたく宣伝をしています。

鹿を継続してとっていくことについては、東京都に予算をいただき「森の恵工房峰」という鹿肉処理施設を作りました。峰は字名です。東京都の保健所の指導で安全に食べていただけるように工夫しております。鹿の肉を加工し、冷凍し、提供しております。奥多摩の旅館、民宿など奥多摩ならではの食として広めていくように努力している最中です。量的にも少ないのでこのように「奥多摩の鹿肉」ということで小規模で進めていきたいと考えています。捕獲した鹿が100%食用として加工できるわけではありません。ハンターの狙いどころによって、商品として提供するにいたらなかったり、血の抜き方によったりとなかなか出回することはむずかしいものです。また将来的には鹿牧場を作ることでも考えていて、羊の牧場を変えて、鹿をいれ、町おこしの基盤として利用することも計画中であります。このことも是非ご理解いただきたいと思います。

自分達の町に誇りを持って

このように私たちの町はいろいろな歴史的経過をたどってきました。地方交付税をもらわない時代があったことなどは誇りに思う点でありますし、図書館も東京都で6番目にできたことも素晴らしい実績であると思います。6000人の町ですが一生懸命自分たちの町に誇りを持ちながら、先輩方の努力を引き継ぎ、財政においても住民の方々と話し合い、東京都の中の奥多摩としていろいろな方々に声援を送っていただける町をつくってゆきたいと考えております。(会場、拍手)

<講師プロフィール>

河村文夫(かわむらふみお)

東京都奥多摩町 町長

平成9年1月より奥多摩町収入役。12年7月より同助役。

平成16年5月24日より奥多摩町長。現在、東京都治

山林道協会長、東京都市町村林野振興対策協議会長、東京都自然環境保全審議会委員も努め自然環境部門に精通。

「生涯健康で自立してともに生きる奥多摩町」を実現するため「第4期奥多摩町長期総合計画」「人・森林(もり)・ふれあい三重奏～森(しん)世紀(せいき)ふるさとづくり奥多摩～」《おくたま森(しん)世紀(せいき)計画》をスタート。

また、町制施行50周年を記念して、生涯健康で生きられるまちづくりの推進と新たな森林空間の利用を図るため、「奥多摩町型森林セラピー」の整備の検討をしている。

今後、森林環境と林業の融和、そして担い手の育成確保を図りたい。

